

# 第35期第5回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



令和4年9月22日（木）京都市生涯学習総合センターで、第35期京都市社会教育委員会議の5回目となる会議が開催されました。今回は、「京都市生涯学習総合センターと図書館の取組み」というテーマで議論が行われました。会議の模様をマナビィがレポートします！

## ■ 出席委員（17名のうち12名） ※五十音順

稲垣 恭子 委員、岡田 智子 委員、佐竹美都子 委員、鈴鹿可奈子 委員、  
園部 晋吾 委員、豊田まゆみ 委員、永田 紅 委員、西田 晋 委員、  
廣岡 和晃 委員、本郷 真紹 委員、柁木 良子 委員、山野真梨紗 委員

## 第35期第5回社会教育委員会議次第

### 開 会

#### 1 議 事

「京都市生涯学習総合センターと図書館の取組み」について

- ① 京都市生涯学習総合センター 説明 木村館長（中央事業館）
- ② 京都市中央図書館 説明 池田課長
- ③ 協議

#### 2 報 告

- (1) 京（みやこ）まナビミーティングについて
- (2) 京（みやこ）まナビいニュースレターについて
- (3) 「令和4年度指定都市社会教育委員連絡協議会（福岡市）」について

#### 3 主催事業及び刊行物の案内

### 閉 会

## ■ 開会

## ■ 教育長挨拶

## ■ 議事 「京都市生涯学習総合センターと図書館の取組み」

### ○ 事務局説明

京都市では、明治2年、日本初の学区制小学校である番組小学校が作られて以降、学校が地域コミュニティの拠点としての役割を担ってきたこともあり、他の市町村で見られる一

定区域内の住民のための公民館施設は、本市にはなく、京都市生涯学習総合センター（愛称 京都アスニー）が、社会教育法第20条に規定される本市の公民館施設となっています。京都市図書館は、京都アスニーと同じ昭和56年4月に中央図書館を開設してから、現在では20館及び移動図書館を運営しています。本市の基本計画「はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン2025」では、京都アスニーにおいて魅力ある取組みを推進し、市民の生涯学習の機会を一層推進すること、また市民の学びと交流の拠点としての図書館機能の充実を推進施策として、資料の収集と発信、いつでも気軽に利用できる環境整備を進めることを目標としています。

○ 京都市生涯学習総合センター 説明 木村館長（中央事業館）

生涯学習総合センターは、市内に2か所、京都アスニーとアスニー山科があります。いずれも公益財団法人京都市生涯学習振興財団が市から委託を受けて事業を行っています。実施している事業は、市や財団が主催する講座などの事業と貸館事業です。

主催事業の主な講座につきましては、「まなびすと」に記載されています。講演会、アスニーセミナー（有料の教養講座）や、京都学講座、特別講演会などを行っています。特別講演会では、「京まなびミーティング」として社会教育委員の皆様にも講演いただいています。アスニーアトリエという実技講座やコーラスグループの運営も行っています。アスニーコンサートは月1回開催しており、企業などから協賛をいただき運営しています。

主な事業の実施状況などについては、令和2年度からは新型コロナの感染拡大の影響を受け、一部の事業は現在も休止しているほか、実施している事業でも、8月までは座席数を半数にするなどの感染対策を行いながら実施しており、コロナ前の状況に戻っているわけではありません。



次に、京都アスニー1階には、古典の日記念京都市平安京創生館があります。約10メートル四方の平安京の復元模型などを常設展示しています。運営には、案内ボランティアに携わっていただき、館内での案内、展示解説のほか、個人で学習された成果を発表する場として、一般の方向けに講義もしています。

次に貸館事業ですが、使用用途や人数に応じて、京都アスニーには17会場、アスニー山科には7会場があります。利用されているのは、例えばコーラスグループや、ヨガ、太極拳、茶道、華道、書道などの教室や、研修会・企業の説明会や近隣のマンションの管理組合、PTAの方々など様々です。貸館事業の利用は、比較的、土曜日・日曜日が多く、また午後の区分が多く、夜間が少なくなっています。

その他には、視聴覚ライブラリーで保有するDVDなどの貸出や財団が制作した書籍を販売しています。

最後に、アスニーの今後については、1つ目として、財団の設立目的でもある「京都の歴史と文化に則した生涯学習」として、従来の事業に加えて、コンサート、平安京創生館、古

典の日関連事業など、事業を拡充してきました。今後もその流れによって継続をしていきたいと考えているところです。

2つ目に、会場の使用は、アスニーが主催する事業を優先していますが、一般利用の多い日曜日は事業を避けてきました。引き続き、貸会場としても有効に利用されるよう努めていきます。

3つ目に、京都アスニーは建築後41年が経過し、設備などの老朽化が今後避けられないところです。限られた予算の中で、必要な保全とハード・ソフト両面で利便性の向上を図っていききたいと考えています。

4つ目に、学校との連携については、平安京創生館を見学するなど活用されていますが、さらに様々な場面で学校教育との連携を進めていきたいと考えています。

今後の方向性などを中心にご意見をいただければと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。



#### ○ 京都市中央図書館 説明 池田課長

はじめに図書館の近況ですが、この2年間はコロナウイルスの感染拡大により、臨時休館や館内での閲覧停止など、サービスの縮小を余儀なくされました。これらの影響により、令和3年度とコロナ前の令和元年度を比べると、入館者及び貸出冊数は大幅に減少しました。一方、インターネットでの予約による貸出冊数は、大幅に増加しました。

次に、コロナ禍において、各種お楽しみ会、ブックリサイクル、読み聞かせコンサート、学校・児童館・福祉施設などへ職員が出向いての読書活動、子どもの職場実習・見学、各種講座など、来館型・対面型サービスは規模を縮小しました。

新たに開始した取組みとしては、非来館型または非接触型サービスが中心となりますが、①Twitter を活用した情報提供や、②公式 YouTube チャンネルを活用した映像情報の発信（醍醐中央図書館の職員が読み聞かせ、ブックトーク、ピブリオバトルなどの映像を制作）、③オンラインによる対面朗読、④電子書籍サービス（令和5年2月開始予定）があります。電子書籍サービスは、非来館者や青少年などで利用が少ない世代への利用促進や、読書バリアフリー法を踏まえて、障害のある方へのサービスの向上にも役立つのではないかと期待しています。またメリットとして、本の管理がなくなるため本の破損・汚損の心配もなくなり、作業の効率化が図れます。一方、デメリットとしては、本の導入数や対象冊数が少ないということがあります。

その他として、「京都市子ども読書活動推進計画」の第4次計画が現在進行中です。この充実施策として、読書離れが指摘される中高生への取組みとしてティーンズコーナーを全館で開設しています。また夏休みに研修室を小中高生向けに自習室として開放する取組み

を行っています。ビブリアバトルは4中央館で、小中高生を対象に実施しています。昨年度は「高校生しおりデザインコンテスト」を開催し、優秀作品をしおりにして全館で配布するなどの取り組みを行っています。

また、令和3年度から開始している「子どもの本コンシェルジュ」養成講座ですが、図書館司書、学校司書教諭を対象としたもので、現在Ⅱ期生の養成講座を実施しています。コンシェルジュは、中学校で出張講座を行う、図書館の幼児コーナーで、リクエストに応じて本の読み聞かせを行う取り組みをしています。大変喜んで何冊も繰り返し本を持ってくる子どももいます。

出前事業専用車「青い鳥号」は、各施設の要望に沿って約200冊の図書を搭載し、学校や園、地域行事、植物園フェスティバルの催しなどに出張し、現地で司書が図書の紹介や貸出、ブックトークや読み聞かせ講座を実施するものです。

最後に、検討課題として、コロナを機に生活様式や利用者の意識に大きな変化が生じる中で、これからの図書館運営において、従来の来館型サービス及び非来館型・非接触型サービスのあり方、また中高生の読書離れ、図書館離れ対策及び市民全体の図書館カード登録率の向上などの課題に対し、今後どのような配慮や取り組み、サービスが必要となるのか、様々なお立場からご教示をお願いします。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

この議論は論が多岐に渡ります。一つは、生涯学習総合センターと図書館の取り組みということで、ソフト面と施設・立地も含めたハード面の問題があります。

ここ数年はコロナ禍で、将来の方向性を測るために、来館者などの数字にどの程度真意を置いていいのかが、課題がございます。このような問題は必ずアウトプットだけではなくて、アウトカム（成果）が求められますので、そのアウトカムの数字を元に政策が議論されると思いますので、その辺も十分に配慮した上で、考えなければならぬと思います。



○ 柁木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

読書離れと図書館離れが進んでいるということですが、本屋でも同じ課題があるように思います。電子書籍やネットで図書を購入するスタイルに変わってきている中で、やはり「行きたくなる」ということが大事だと思います。TSUTAYAは、最近ブックカフェという形式で、本を買いに行くという目的だけではなく、心地の良い時間と空間を提供するという形で、全国に店舗数を増やしています。ですので図書館に関しても、いろいろな世代の方が「あそこに行きたいな」と思う場所作りがこれからの課題になってくると思います。



先日、ある美術館のミュージアムストアで、私が今とても必要としていた本を見つけまし

た。ですので、一つの目的以外に、そこに行った時に何か発見するという付加価値が必要になってくる時代かなとも思いました。

やはり、図書館に行きたくても行けない方もいます。移動図書館の活動をされていますが、高齢化社会ですし、高齢者施設や病院で外に出られない方や、簡単に行けない方のために図書を運んでいくことは必要なことだと思います。事前に「どんな本を読みたいですか」とお聞きして、1か月間くらい貸出をして、「次はどんな本を読みたいですか」と、循環していくようなシステムを作っていかれてもいいのではないかと思います。

先日、「読書療法」という言葉を聞きました。心の病がある方が、本を読んでいくと、回復・改善していくそうです。日本では、まだ読書療法は浸透していませんが、欧米の方では盛んだそうです。

また、対面朗読のお話もありましたが、一人で読むということと、カウンセラーとマンツーマンである、集団で読み聞かせのような形だと、いろいろなやり方で読書の場を提供していく必要があるのではないかなとも思いました。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハッ橋総本店専務取締役）

図書館について、デジタル化が進んでいますが、やはり紙の本が並んでいて、そこから好きなものをピックアップするという場がとても大切ではないかと思っています。

私自身は、図書館を利用せず、本屋に行っていました。しかし、1年程前から、娘の本を借りるために図書館を利用するようになりました。2週間に1回図書館に来て、私と娘のカードで20冊ずつ2週間本を借りています。娘は自分から「図書館に行こう」と言うようになり、20冊を3日で全部読むくらい、本好きになっています。これは図書館のおかげだなと思っています。



本を買って子どもに与えることは簡単ですが、正直なところ、本屋に子連れで行くというのは、売り物が並んでいるので、ハードルが高いです。娘は、図書館で自分が選んだ本の表紙を見比べながら、本を選ぶのがとても楽しいようです。おかげで、今では一人でひらがなを追って読むまでになりました。やはり小さなうちから図書館に通い慣れていたら、場所もわかっているので、その後も自分で来たり、交通手段がない場合はデジタルで借りるというようになっていくのではないかと思います。

私も最初、図書館に来る時はハードルが高かったのですが、周りにいたお母さん方のおすすめがきっかけで来るようになりました。一旦図書館に来てカードを作ると、ハードルが下がり、割と来やすいのではないかと思います。

ネットで本を買う機会が増えました。専門書などがズラリと並んでいる本屋も閉まり、これから本屋はおそらく減っていくでしょう。先ほど、中央図書館を見てきましたが、いざ本にどっぷり浸かって探そうといった時に、専門分野の本が並んでいて、自分でペラペラと本をめくりながら選べるというのは、貴重な場ではないかと思っています。

ハード面ですが、20冊の本を借りるととても重いので、駐車場があるのは子連れで行く

には本当にありがたいです。立地も大切ですが、駐車場は必要ではないかと思いました。

しかし、唯一困ったのがトイレの問題です。子連れで行くと、トイレがとても狭く、おむつ替えもできませんでした。子ども用の本やイベントが充実しているのに、行くのを渋る原因がトイレでした。トイレの環境が改善されれば、子連れで図書館に行く人も増えるのではないかと思いました。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

月1回は地元の西京図書館へ行き、孫への読み聞かせの本や小説、趣味の本を借りています。先日、ティーンズコーナーがあるのを初めて知り、孫と話をしました。孫は『14歳の健康医学』という本を借りていて、中学生の目線で精神面、健康面のお話がわかりやすく書かれたものでした。また、リライトノベルという言葉も初めて聞きました。彼女は『坊ちゃん』のリライトを借りていました。主人公を中学生に置き換えて書かれたものです。自分と同じ目線で書かれた、中学生向けの良い本がティーンズコーナーにはたくさんあり、良い取組みだと思いました。



私自身、仕事をしている時は、休日に図書館へ行き、文学教材と同じ作者の本をたくさん借りるのに役立っていました。

図書館のカード登録者数が、全市民の20%台後半ということで、うちにも本好きの家族がいますが、図書館では本を借りません。その理由は「期日があるから。」ということです。延長もできますが、好みの専門的な本が少ないということもあり、本好きであるにもかかわらず図書館を利用しません。

しかし、私たち高齢者にとっては、とてもいい施設です。本をこれ以上増やさなくてもいいし、新しい本もあります。「リサイクル図書のコナー」で本をもらうこともでき、とてもありがたいです。

コロナの時は、いろいろな方が本を触るので衛生面が少し心配でしたが、借りた本を消毒する機械を置いてくれました。どの程度殺菌できているかはわかりませんが、気持ちの面では機械を利用し、安心して借りていました。今後も図書館を利用したいと思っています。

先ほどご意見のあった、図書館に行けない人のために移動図書館が施設や病院を回る取組みは、ぜひやってもらいたいと思います。今後、ますますそのような取組みが必要になってくるのではないかと考えています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

高齢者や私達にとって、図書館は一番の情報源であり、知的好奇心を満たしてくれていました。一方で、デジタル世代は、デジタルに慣れ親しむうちに、本がなくなってしまうという困った現状があります。学生も、コンピューターを扱う技術は持っていますが、本には馴染みがない学生もいるように感じます。

○ 山野 真梨紗 委員（市民公募委員）

確かに中高生の読書離れが問題になっていますが、同時に大学生の読書離れも、深刻だと感じています。ですので、ぜひ京都市の図書館にも、大学生を対象にした読書のコンテンツやサービスを検討していただけたらと考えています。大学生の多くは、おそらく京都府立図書館を使う人はいると思うのですが、なかなか市立図書館には行く機会がないように思います。



大学の図書館は、専門書も多く充実しているので、なかなか市立図書館には行かない。でも大学の図書館にはない新たな付加価値、例えば TSUTAYA のようなカフェと併設された図書館があれば、大学生も気軽に図書館に入り、本の魅力に気付けるのではないかと思います。

先ほど京都市中央図書館に初めて行きましたが、各種パスファインダーが用意され、図書館に訪れたことがない人も、気軽に本を探ることができるように様々な工夫がされていて、魅力的な図書館だと思いました。アスニーコンサートなど地域の催し物の情報も充実していて、ここに来たら地域の人たちと繋がるきっかけがあると感じました。情報を見て「こんなイベントがあるんだ、参加してみたい。」となると思います。ですので、「図書館に行けるきっかけ作り」というものを、ぜひ皆さんと考えていけたらなと思っています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

最近は大学図書館の一角にカフェを入れて、「喋って他の人に迷惑をかけてはいけない」ではなく、「自由に講談できますよ」というように変わってきています。そういう空間を一角に作るのは大事なことです。それによって学生が集まってくることがわかってきました。やはり学生の集まる環境を設けていくというのは、重要な視点ではないかと思います。

○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

「図書館では静かにしないとイケない」というお話で思い出したのですが、昔、日本人は新聞でも本でも、音読するのが普通だったそうです。それが明治時代に図書館ができて、そこでは「音読禁止」ということで、黙読が始まった、と聞いたことがあります。黙読と音読の歴史が面白いですね。



先ほどから皆さんおっしゃっていますが、欲しいものが決まっている時はネットで購入するのが一番便利ですが、やはりリアル書店や図書館でいろいろな本に出会えるのは面白い。小3の娘も、学校の図書館は「調べ学習で目的の本を探しているときでも、それ以外にいろいろな本を見られるのが楽しい」と話をしていたので、子どもでもそう実感しているんだなと思いました。

リアル書店は、売れる本ばかりが並んでいて、本が置かれている期間も短くすぐに引き下げられてしまい、とても落ち着かない感じがします。その点、図書館に行けば古い良い本もずっと置いてあるという安心感があります。

図書館というと、子どもの頃、借りたい本を抜いた後に入れる「代本板」を使っていました。一冊抜いた後に空間ができて、分厚い本を借りるときには頑張るぞと、ちょっと誇らしげな気持ちがあったりして、そのような感覚は図書館ならではの気がします。インターネット空間からいくら情報を抜き出しても、自分が取った情報の量が実感できないんですね。図書館に行って全体を見わたして、まだ自分が読んでいない本がこんなにあるんだと実感する、その驚きと畏怖の念を持ち続けたいと思っているところです。

図書館は、一回借りたら、返しに来て、その時にまた借りてというサイクルが生まれるのですが、来なくなると全然来なくなってしまう。そのサイクルにのれたらいいなと私自身も思っているところです。

また、私は、京都府立図書館協議会の委員をしています。ふるさと納税で図書館事業に貢献できるということをそこで初めて知りました。文化事業に納税することも大事だと自戒を込めて思っていたところでした。

図書館で開催される「0才からの絵本コンサート」も、いいですね。私も、乳幼児を育てていて一日どこで過ごそうかと困っていた時に、このようなイベントに行けたらよかったです。

(参考) 京都市図書館  
ふるさと納税のご案内

また、来館者数、貸出冊数などは指標にはなりますが、数にこだわりすぎなくてもいい。「図書館に来たら安心するな」、学校に行きづらい子が「図書館には来てもいいな」と思ったり、そういう居心地のよい居場所としても、大事だと思います。数値化できない質の部分を、どう評価してゆくののかも大切だと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

永田委員のおっしゃる通り、数だけでは測れないところがありますが、今日の評価では、やはり数が前端的に出てしまうことがあります。大阪府でも、3年続けて定員割れをおこした3つの高校を閉鎖すると課題になっていますね。財政面もありますので、数値と、数値では測れないところと両方を考えていく必要があります。データの扱いは、慎重に考えていかないといけないと思います。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

私は、小学校の夏休みには、毎日図書館に通うくらい図書館と本が好きでした。大人になってからも、あの時代に本を読みあさったのが良い経験だったなと思います。住まいの近くの北図書館は、下に児童館があり、児童館で遊んで図書館で本を借りて帰るというのが一つの行動パターンになっていてよかったです。



地方では、駅ビルや商業施設の中に、本屋に併設された図書館があり、多くの利用者がいました。京都市の図書館は、正直なところ行きにくい場所にあると感じています。金銭的な問題もあるかと思いますが、テスト的にどこかを閉鎖し、駅ビルに図書館を入れると、来場者は必ず増えるだろうと思います。

質問ですが、移動図書館の来場者数や伸び率は、いかがですか。

○ 事務局

移動図書館は、20館ある図書館の空白地帯を回るような趣旨で41か所のステーションを回っています。利用については、やはり固定的な部分もあります。今は1台の車で回っており、箇所数を大幅に増やすことはできていないのが現状です。



○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

病院や高齢者施設、子どもの施設など、移動図書館の需要は多いのではないかと感じています。「来場して使う」という行動にハードルを感じると思いますので、行動変容の例として、場所や期間を限定して、夏休みに大学の資料や受験勉強に使う本を置き、自習室としてティーンに使ってもらうなどはいかがでしょうか。高齢者や子ども、ティーンと対象別に、目的があると思うので、場所や期間を絞り、まずは利用をしていただくと、利用者数としては増えてくるのではないかと思います。

ネットでも調べられますが、リアルの部分で、本で調べたい人、本が好きな人が減ってるわけではないと思います。行動のパターンに図書館がはまっていないと利用者が減っていくのは、現実的に問題としてあると思います。（行動パターンに図書館が入っていない人も気軽に参加できるように、）例えば子どもと一緒に本を見ながら折り紙をするなど、読む・知るといった目的だけではなく、次の行動も含めた目的と組み合わせてイベントをされたいのではないかと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

ロケーション、ハードルの問題をあげていただきました。各年齢層の人の流れ、動線を十分に配慮したうえで、場所の配置についても、将来的な課題として考えていかなければなりません。

今図書館の議論に集中していますが、もう一方の議題である、京都市生涯学習総合センターの1階には、平安京が一望でわかる良い施設（平安京創生館）がありますが、ここには観光客が来ないので、宝の持ち腐れになっています。これが京都駅の一角にあったら良いのではないかと思います。そのあたりも将来的には改善を図っていただければと思っています。

○ 岡田 智子 委員（市民公募委員）

私は、大学のレポートを書くために、常時、京都市図書館で図書を10冊借りています。図書館に足を運んで図書を探す時間がとれないので、インターネットで本の予約ができて助かっています。また、費用面に関しても、買うと費用もかかるので、本当にありがたいです。

貸出し期間は2週間で、さらに2週間延長できますが、慣れてくれば自分の中でルーティンができるので、貸出しやすい工夫をしていただいていると思います。

図書館では、予約した本を借りてすぐに帰ります。図書館には長く滞在しないという使い方もあります。10冊の本は重いので、車が駐められると便利です。

また、資料の検索も、電話で司書の方が相談にのって探してくださり、地方にある文献を借りることもできます。

デジタル図書も利用しています。紙の本は、バラバラと見て目に入る情報がありますが、デジタルは、一枚ずつページを送っていかないといけないので、デジタルにはデジタルの使い方があるのかなと思っています。今後、本も目の前にパッと現れてくれるようなデジタルの社会になっていくと思います。デジタル化には、できるだけ対応していただけると将来的には良いと思います。



オーディオ図書も、家事など用事をしながら聞けるので、視覚障害の方に対してだけではなく、見える人にも有益だと感じています。

また、図書館とカフェの併設は良いですね。例えば、学生がグループで一つのテーマについての文献を読むことがありますが、声を出して話ができる場所があればいいなと思います。

また、個人的な意見ですが、京都市図書館も京都府立図書館も、源氏物語の関係の資料が乏しいように感じています。世界的にも注目され、翻訳ソフトもありますので、今後、世界各国の源氏物語の関係資料を図書館に入れていただけると、京都の歴史と関係しているのではないかと感じています。

#### ○ 稲垣 恭子 委員（京都大学理事・副学長）



図書館や社会教育施設は、オープンで壁がなく、入りやすい空間づくりが大事だと思います。知り合いが山形の子どもの社会教育施設「シェルターインクルーシブプレイス コパル」の建築に関わり、その施設を見に行ってきました。とても大きい施設なのですが、山並みと屋根がシンクロしているような柔らかい感じで、外はオープンなガラス張り、段差もなく、靴を脱いで入る施設でした。

ただ知識を得るだけならデジタルでいいのですが、図書館は、デジタルで知識を得る以外の、イベントなどものの魅力と組み合わせられているということが大事だと思っています。その時に、空間づくりは重要な役割を果たしています。オープンな空間で、本を自由に選んで、階段に座ってすぐ読めるという空間も良いですし、選んだ本を少し隠れたところで1人で読む。皆もいるけれど1人になる。それは家で1人でのとは、また違った良さがあります。図書館に行って読むという魅力を倍加していくような空間があるといいです。

財政難で難しいかもしれませんが、図書館の改修や新築ができれば、シンボルとなる中央館は、新しいコンセプトで大々的に作ったらいいなと思っています。

また、図書館コンシェルジュの役割はすごくいいと思っていました。私は、読んだ本が面白かったら、その人の本を全部読みたくなり、その人がどういう人で、どんな生活をしているのかまで知りたくなります。その人に私淑するみたいな感じです。自分1人ではなかなか

魅力を発見できなくても、コンシェルジュを通して、自分の新しい興味を見つけられるといいですね。根本的なところで、読者に楽しみを伝えるというコンシェルジュの役割を大きく広げていただけるといいなと思っています。

また、図書館とそれ以外のもの、施設の関係をトータルにできるような複合的な役割もあると思います。本を読むところやカフェがあり、そこで読書会や本に関連するコンサートがあり、トータルで楽しめて、ついでに図書館にも寄ってもらうということも大事なかなと思います。

「ダイバーシティ&インクルージョン」とよく言われますが、具体的に空間の中でどう実現するかは、あまり考えられていません。だから、障害があるなどで図書館に来にくい人たちも、分けけてその人達だけの空間を作るのではなく、そこで一緒に読書会をするなど、具体的な空間づくりでインクルージョンということも考えて、コンセプトとしても、整理する機会があるといいなと思いました。

○ 西田 晋 委員（京都市小学校長会理事、京都市立市原野小学校長）

私は、子ども達には「おやつを食べるように本を読みましよう」と言っています。日常のサイクルの中で、楽しく読書に親しんでほしいと思っています。

学校の図書館も変容しています。国でも「学校図書館図書整備等5か年計画」で、平成29年から令和3年、そして6次計画として、令和4年から令和8年まで整備が進められています。3つのポイントがあり、1つは図書の整備、2つ目には1～2社の新聞を置く、3つ目は、学校図書館司書を採用するという事で、予算が割かれています。



GIGAスクール構想で、タブレットの配布も進んでいますが、子ども達の学習では、「ほんまもん」と出会う体験が大事です。本との出会いの中で、つながっていくこともありますので、将来的には全てがデジタル化になるかもしれませんが、今の段階では、両方を使い、それぞれの良さを感じられるようにしていきたいと思っています。

学校と図書館との連携については、学校に本の貸出をいただいています。例えば、小学1年生で「自動車に関する図鑑を作ろう」という学習の時、学校図書館の1万冊前後の中で、自動車に関する本は限られています。そこで、図書館に貸出を依頼すると、調べ学習の場合はカード1枚で40冊、読書用の図書は200冊を1か月間借りることができます。本当にありがたいので、ぜひ継続してもらいたいと思います。

学校の図書館施設は、「静かに読書をする場」が一般的でしたが、今では、国からも、いくつか機能を有することが例示されています。本校では、静原小学校と市原野小学校の2つが統合したことを機に学校図書館を「静市学習情報センター」という名前に変え、4つの機能を持たせています。1つ目には、読書の楽しさと喜びを感じることで読書センターとしての機能。2つ目には、学習ができるスペース。3つ目には、タブレット、パソコンを配置し、情報センターとしての機能。そして最後には、学年を超えて集える交流の場としての機能です。

最後に、アスニーの平安京創生館についてです。私は以前、この近くの小学校に勤務している時に、平安京の復元模型の見学をさせていただきました。6年生社会科で平安時代の学習があります。ボランティアの案内のもと見学し、子どもたちは教科書に掲載されているものの実物や模型を見ることができました。加えて、十二単を着る体験もできました。これも子どもたちにとって、学習意欲を高めるのにいい経験だったと思います。「ほんまもん」と出会う良い機会になりました。このような施設が各地域にできないかなと願っています。

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

資料のデータについての質問ですが、来館者数、貸出冊数、予約冊数は、京都市の図書館全部の総数でしょうか。予約冊数は、どういう数字なのでしょう。

また、YouTube チャンネルでされたブックトーク、理科実験やビブリオバトルとは、どのようなものですか。

○ 事務局

来館者数などは総数です。予約冊数は、パソコンやスマホ、図書館のカウンターなどから予約した図書の数です。今、誰かに貸出していて図書館に本がないため予約される方、図書館に本がある状態で予約して、職員が本を準備し、その後受け取りに来るとした場合の、両方の数字が入っています。

YouTube で配信している映像は、醍醐中央図書館の職員が自ら制作したものです。ブックトークは本の紹介などを行い、理科実験は小学生が簡単にできる実験を理科の先生から聞いたうえで、職員が映像として撮り、配信しています。ビブリオバトルは、5人程度が好きな本を紹介して、観戦者がそれに対して一番読みたくなった本に手を挙げて、チャンプを決めるというものです。[【京都市醍醐中央図書館 YouTube リンク】](#)

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

ありがとうございます。来館者数や年代別のデータは取られていますか。先ほど中高生の読書離れという話もありましたが、過去5年で、中高生の年代が減っているのか、どの年代で減ったり増えたりしてるのか、少しわかりづらいように感じました。

○ 事務局

経年で、年代別のデータを取っています。児童（小学生以下）の貸出冊数は、コロナ以前の令和元年度に、過去最高の貸出冊数になりましたので、子ども（小学生以下）の読書離れについては、図書館としてはあまり感じていない状況です。

この課題については、子どもの健診の時に無料で本をプレゼントし、子どもの読書の機会になりますよとアナウンスすることで、保護者の意識も高まってきたと思います。子どもの数は減っていますが、図書館で本の貸出は増えている状況です。

中高生につきましてはもともと利用が少ない状況でしたが、現在、中高生向けに新たな取組みを始め、従前よりは若干増えてきています。また、同じく利用の少なかった大学生につ

いても、コロナ禍で大学図書館が閉まった影響もあり、図書館の利用が少し増えてきています。

大人の年代については、全体的に減少しています。特定の年代が大きく減っているわけはありませんが、従前、読書に使っていた時間が、スマートフォンを使う時間に流れているという傾向はあります。

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

データを分析し、まずは図書館の利用を増やしていくなど、次の展開を考える必要があるかと思います。

なぜ私が図書館を利用しなかったかという、あまり図書館を利用する必要性に迫られなかった、利用する機会がなかったというのがあります。だからといって、本を読まなかったわけではありません。大学時代は、一人暮らしでスマートフォンがなかった時代ですので、余剰の時間で本を読むこともありました。本は買って読み、読んだ本がたまっていくことが嬉しかったものです。今の時代は、一人暮らしをしても、スマホがあると本に費やす時間がほとんどないのかなと思います。そうすると、やはりスマホを持つ前に、本を読む習慣をつけていかないといけないと感じます。



学校の図書館を利用するのは一番手っ取り早い方法ですが、それでは地域の図書館に対するハードルは下がりません。やはり実際に、図書館に行って借りる経験をすることによって、ハードルが下がってくると思います。ですので、ハードルを下げるためには、小学校の夏休みや冬休み期間に、「図書館に行って、本を借りてきてください」と言っていく必要があると思います。小さい時に図書館に親しみがあれば、大人になってまた図書館に戻ってくることがあると思います。

私のように小さい頃に図書館へ行った経験がないと、図書館に行くことへのハードルが高い状況です。やはり、きっかけづくりはとても大切です。食育でも同様に、経験できるきっかけを作って、子どもたちに気づかせたり、触れさせてあげたりすることによって、ハードルが下がって、次の段階へと進んでいくということが、一つの流れになっていると思います。小学校の夏休みに毎年、図書館に行くことによって、最低6回は図書館に行くことになりしますので、そのような繰り返しのきっかけづくりや提案が大切なのではないかと思います。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

公共図書館として、一定の数は維持していただいて、身近なところに図書館があり、誰もがそこに行って本が借りられる、本に出合えるということが大事だと思います。幼児から高齢者の方まで様々なニーズありますが、先輩達が作ってきた図書館という財産を、できるだけ後世に伝えていきたいと思っています。

図書館で借りたい本が借りられるというところを、どう継続していくかが課題です。少子化ですが、だからこそ1人当たり選べる本の数は多くなります。

今の時代に合わせて、地域の方を交えて、図書館が防災拠点となる、生涯学習の場となるなど、様々な形の集合拠点になるというと考えています。費用については企業に協力していただく、建物を賃貸に出しながら維持していくなどの方法もあります。



少子化のため、今、学校を減らしていく方向にあります。学校は地域の財産ですので、学校を拠点に様々なことを組み立てるといいのではないかと考えています。財政事情で、減少することが、やむを得ない時がくるかもしれませんが、そうならないように、拠点を維持しながら、外郭化する、企業や外部からお金を借りながら、皆さんが寄り添って、多面的にさまざまなことができる拠点にしていただければありがたいと思います。

京都府の中でも図書館の設置状況や蔵書数には格差があると思います。誰もが本に触れられる環境については、ぜひ維持していただきたいです。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

最近、新キャンパスを考える際には、大学図書館を市民に開放することは、当たり前のようになっています。防災拠点として活用するということが、行政体や大学という枠を超えて、図書館同士で連携して、新しい展開を図っていくのが望ましいと思います。本来は、図書館を24時間開けるといいのですが、セキュリティの問題もあります。お互いに、組織として意見を出し、工夫して多くのオープンな場を提供できるようにしていく方向性が大事ではないかと思っています。

本日も貴重な意見を、多数の方から頂戴しまして、ありがとうございました。

同時に、「生涯学習総合センターと図書館の取組み」というテーマでしたが、前者の生涯学習総合センターについては、あまりご意見を頂くことができませんでした。また改めて、生涯学習の場や施設をどういう形で展開するかについて、ご意見を頂戴する機会を設定できればと思っています。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハッ橋総本店専務取締役）

質問ですが、図書館のホームページに、YouTube ページへのリンクが見当たらないのですが、どうしたら見れますか。頻りに図書館に来ていますが、YouTube の配信を知らなかったのでお尋ねしました。

また、子どもの本コンシェルジュですが、実際に図書館内で本を勧めるという活動をされているのでしょうか。

○ 事務局

YouTube 配信の位置付けとしては、各図書館での試みの一つで、現在は醍醐中央図書館が YouTube を使って様々な発信をしています。まだ京都市図書館トップページには掲載

できておりません。京都市図書館ホームページ内の醍醐中央図書館のページ、または、YouTubeで「醍醐中央図書館」を検索すると、見ていただけだと思います。

コンシェルジュについては、養成自体がこの数年内に始まったところですので、全館配置にはなっておりません。コンシェルジュには、学校図書館支援の研修に出向いてもらうなどしています。これから全館に広めていきたいと考えています。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハッ橋総本店専務取締役）

とても良い試みなので、ぜひホームページのトップページに「コンシェルジュの人がいますよ」と掲載していただきたいと思いました。

皆さんの意見を聞いて、私自身が本を読むのが好きで、振り返ってみると、小学生の頃に母と一緒に本の話をする時間があり、また小学校4年から6年までの塾では、1週間に1冊、名作を読んで感想を書き、そして先生が感想を書いてくださることがあったので、いろいろなことについて話をするのは、大事な習慣だったのかなと思いました。海外の図書館のように「話ができる図書館」が京都市にできたら良いなと思いました。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社滋賀本社代表・編集局長）【メッセージ】

先日、調べ物のため右京中央図書館を訪れました。1990年代の週刊誌を閲覧したいと思い、相談すると、端末にキーワードを入力して該当の記事を検索する方法を丁寧に教えてもらい、目的の記事を探し出すことができました。

もちろん、どこか遠方から端末をたたいても同じ結果が得られたかもしれませんが、司書の方々とやりとりから、週刊誌にまつわる周辺情報を得ることもできました。やはり、図書館は足を運んでこそ十分に活用できるとの思いを強くしました。気軽に足を運べて、深く調べることができる。図書館をそんな空間にしていくことが求められます。

コロナ禍では、休館や開館時間の短縮で、利用には不便さを感じました。目的の本の所在をネットで事前に調べ、取りに行く利用法が多い身には、時短よりも滞在時間・人数制限のほうが感染防止に資すると思いました。大声を出さず場でもない図書館ではクラスター発生もなかったように思います。こうした場合の図書館サイトの活用など、もっとPRしておいてもよいと考えます。

図書館は「生涯学習の拠点」と位置づけられ、人生を豊かにする観点での本揃えや、イベントが催されています。それはそれで重要なことです。

ただ、若い世代の図書館離れ対策を考えるなら、もっと実践的に、現実の社会課題の解決に役立つ図書館という視点も必要ではないでしょうか。

先日死去された稲盛和夫さんをはじめ、京都は起業家が多く活動するまちです。事業を興す際に必要な知識、資料をそろえた「ビジネス支援の拠点」という位置づけを与えることで、新たな「客層」の開拓にもつながるのではないのでしょうか。現にそうした図書館づくりを目的とした協議会もあるようです。

いまは受験勉強に忙しい中高生も、就職や大学進学以降の夢を実現する実践的な学びの場としての図書館を認識できるかもしれません。カード登録者数も重要ですが、いったん図

書館の有用性を深く知った利用者はヘビーユーザーになり得ます。こうした観点で図書館利用を考えてみることも必要だと思います。

## ■ 報告-1 「京まなびミーティング」について

○事務局から

6月17日、永田委員に「はじめての短歌一日々の暮らしに発見を一」というテーマで、6月24日、稲垣委員に「朝ドラと成長物語を考える」というテーマでご講演をいただきました。

○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

皆さん、大変熱心に聞いていただきました。私の講演を聞いてくださった若い男性が、「短歌は日常の簡単な言葉で作っていいのか」と思われ、人生で初めての短歌を作って、それでプロポーズされたという話を伺い、講演してよかったなと思っているところです。ありがとうございました。

○ 稲垣 恭子 委員（京都大学理事・副学長）

大変楽しく講演させていただきました。朝ドラは、女性の成長を扱っているものが多いので、女性が多いかと思いましたが、男性も結構来ていて、男性のファンも多いのだなと思いました。

インターネットで朝ドラを5分だけ見られるページがあり、会場にはインターネット環境がないため若干苦労しましたが、無事に映像も見られたので良かったと思っています。ありがとうございました。

## ■ 報告-2 「京まなびいニュースレター」について

京まなびいニュースレターを8月に発行しました。第3回の社会教育委員会議での「生涯を通して学び続けるために」と題した協議でのコメントをまとめた内容で構成しています。作成にあたり、委員の皆様にご協力いただきましてありがとうございました。

## ■ 報告-3 「令和4年度指定都市社会教育委員連絡協議会（福岡市）」について

今年7月に福岡市で、指定都市の教育委員会の連絡会議が現地集合で3年ぶりに開催されました。

「民間団体と連携することにより、野外活動に係る体験の機会の充実につながった取り組み事例」などをテーマに協議が行われ、京都市としては「自然大好きフェスティバル」を紹介しました。親子が大自然の素晴らしさを感じるとともに、野外活動青少年健全育成団体のスタッフの交流を深める場として、有意義な事業であることを説明しました。他の都市からも、農協と連携した農業体験などの情報提供がありました。

来年は横浜市でオンライン開催、再来年は京都市で開催の予定です。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

■ 閉会

■ 閉会挨拶（的山部長）

